目次

一、『教行信証』とは　7
■親鸞聖人の姿勢―題号・撰号―　8
■『教行信証』の構成　10
■各巻の主題　14
■『教行信証』撰述の背景　19
■撰述方法―「文類」という営み―　21
■『教行信証』はいつ書かれたのか　24

二、「坂東本」とは　27
■三本の『教行信証』　28
■思索の跡―三本の『教行信証』をとおして―　32

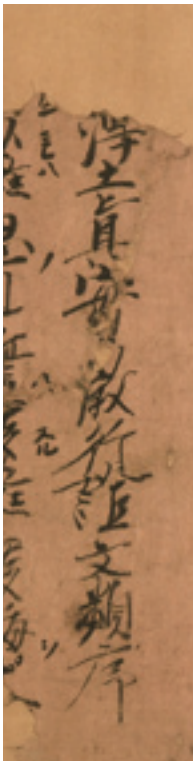
三、「坂東本」の特徴　35
■「坂東本」の構成と体裁　36
■文章の追加・削除　39
■「坂東本」執筆の過程　42
■特徴①　朱筆　43

■特徴②　送り仮名　45
■特徴③　声点　46
■特徴④　右訓・左訓　48
■特徴⑤　上欄の註記　49
■特徴⑥　合点・角点　51
〈コラム〉
◎「獲信見敬大慶喜」と「獲信見敬大慶人」　54
◎『坂東本・教行信証』における字形　56
四、私たちにとって「坂東本」とは　57
■「坂東本」から窺える聖人の姿　58
■宗祖・親鸞聖人と出遇う　59
五、『坂東本・教行信証』の三序　61
■「顕浄土真実教行証文類序」（総序）　62
■「顕浄土真実信文類序」（別序）　66
■「顕浄土方便化身土文類六」跋文（後序）　69

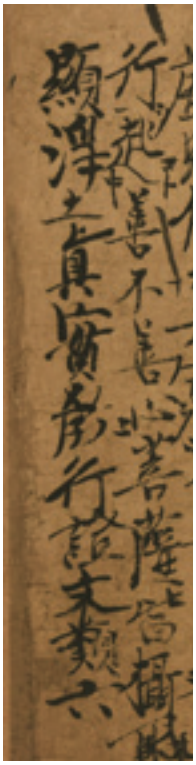
親鸞聖人の姿勢―題号・撰号―

『教行信証』は、詳細には『顕浄土真実教行証文類』＊と言います。

名は体を表すと言うように、題号はその書全体の骨格を表すものです。まずはこの題号から、親鸞聖人がこの書に込めたこころを尋ねてみましょう。



「総序」



「化身土巻」

この題号は、大きくは「顕浄土真実教行証」と「文類」とで区切ることができます。

まず「顕浄土真実教行証」です。これを親鸞聖人がどのように読まれていたのかは、返り点が付されていないため、推測するしかありません。「浄土を顕す真実の教行証」や「浄土真実を顕す教行証」など、さまざまに読まれますが、本書では、「浄土真実の教行証を顕す」という読み方から尋ねていきます。

はじめの「顕」とは、「顕す」ということです。微かなもの、はっきりとしないものをはっきりさせるという意味があります。「浄土真実」とは浄土が真実であるということ、仮・偽りではない浄土ということです。

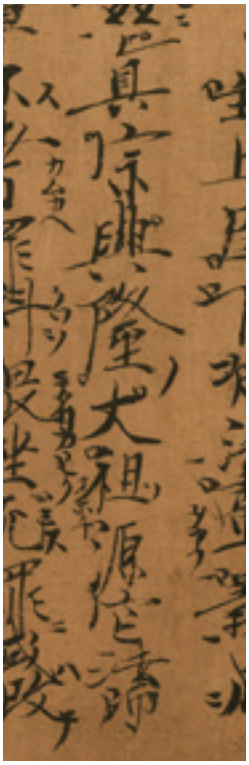
次にある「教行証」の「教」は教え、「行」は教えに従った実践、「証」はその実践によって得られる果を言います。少し訳を加えると、〝教えによって道を指し示され、そしてその道を確かに歩むことが成り立つ〟という言葉です。まとめると「真実の浄土によって歩む道をはっきりとさせる」ということでしょう。

また「教行証」を別の言葉で言えば、真宗の「宗」に通じていきます。「宗」とは要・依りどころというこ

とです。つまり、「顕浄土真実教行証」は、端的に言えば「顕浄土真宗（浄土が真の宗〈依りどころ〉であることを顕す）」といただくことができます。

親鸞聖人自身は、浄土真宗を明らかにされたのは、師である法然上人（一一三三～一二一二）であると受け止めています。例えば、『教行信証』の最後にある「後序」と呼ばれる箇所には、

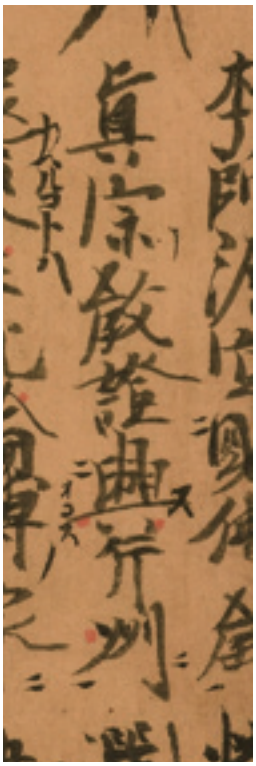
真宗興隆の大祖源空法師　（「化身土巻」聖典第二版473頁）



と、真宗を盛んに興してくださったのは源空法師（法然上人）であるとされ、ほかにも、「正信念仏偈（正信偈）」で法然上人を讃える言葉の中には、

真宗教証興片州（真宗の教証、片州に興ず）

（「行巻」聖典第二版232頁）



とあります。「片州」とは辺境の島国である日本のことです。つまり私たちが今生きているこの場に、真宗の教証を興してくださったと示しています。ですから、法然上人が明らかにしてくださった真宗を開顕するという意味が、「顕浄土真実教行証」には込められているのです。

次に「文類」です。「文類」は、「顕浄土真実教行証」、「顕浄土真宗」という課題を果たしとげていく具体的な方法を示すものと見ることができます。

＊『顕浄土真実教行証文類』の呼び方については、古来、「教行証」、「教行証の文類」、「教行信証文類」などがあり、「御本書」「御本典」とも呼ばれてきた。現在は、一般に広く「教行信証」と呼ばれている。

「坂東本」の構成と体裁

まず「坂東本」の構成について見ていきます。「坂東本」は全六冊から成る書物です。そして『教行信証』は六つの主題（教巻・行巻・信巻・証巻・真仏土巻・化身土巻）で構成されています。しかし、これがそのまま六冊にはなっていません。では、どのような構成かと言うと、次のとおりです。

第一冊
顕浄土真実教行証文類序（総序）
顕浄土真実教文類一（教巻）
顕浄土真実行文類二（行巻）

第二冊
顕浄土真実信文類序（別序）
顕浄土真実信文類三（信巻）

第三冊
顕浄土真実証文類四（証巻）

第四冊
顕浄土真仏土文類五（真仏土巻）

第五冊
顕浄土方便化身土文類六本（化身土巻）

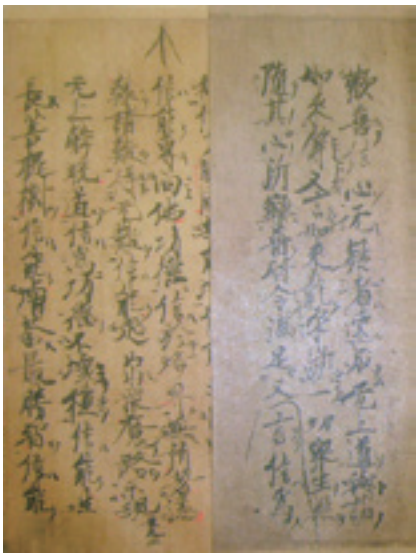
第六冊
顕浄土方便化身土文類六末（化身土巻）

おそらく親鸞聖人は、一冊一冊があまり厚くなりすぎないように配慮されたのでしょう。そのため、各冊はおおよそ同じ厚さで整えられ、文章量が多い「化身土巻」は、本と末の二分冊にされています。

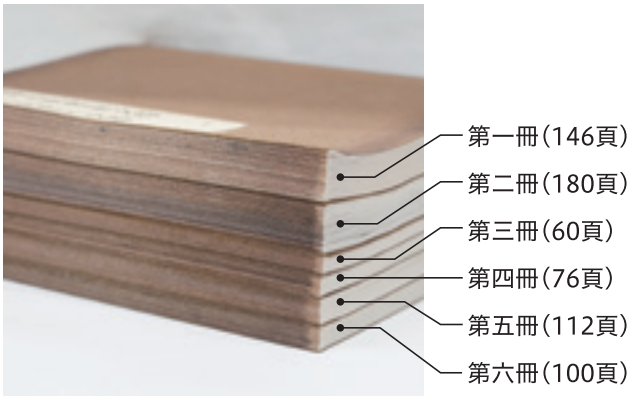
次に体裁ですが、各冊とも縦二九・七センチ、横二六センチという大きさです。また、使用されている紙は、楮紙（こうぞし）、宿紙（しゅくし）、そして雁皮紙（がんぴし）と呼ばれる三種類が主に使われています。楮紙というのは、古くは公文書や経典などの用紙として使用された和紙です。宿紙とは、いったん書いた紙をほぐして、もう一度漉（す）き直した和紙、いわゆるリサイクルペーパーのようなものです。雁皮紙も和紙ですが、やや光沢があり、滑らかな紙質で当時は貴重な書に用いられたものです。「坂東本」でのおおよその割合は、楮紙八五％、宿紙一四％、雁皮紙一％になります。そして宿紙が使用されるのが「信巻」、雁皮紙が使用されるのが「行巻」に限られています。

「坂東本」全6冊

第二冊
信巻



楮紙　　宿紙

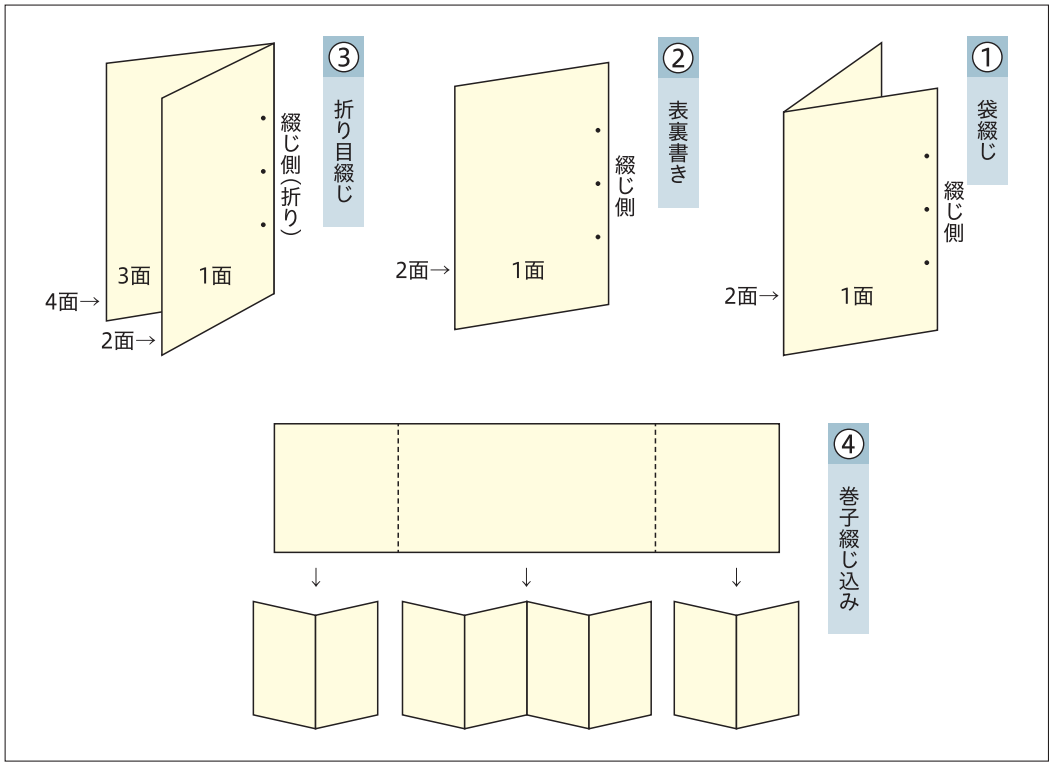


「坂東本」（影印本）側面の様子

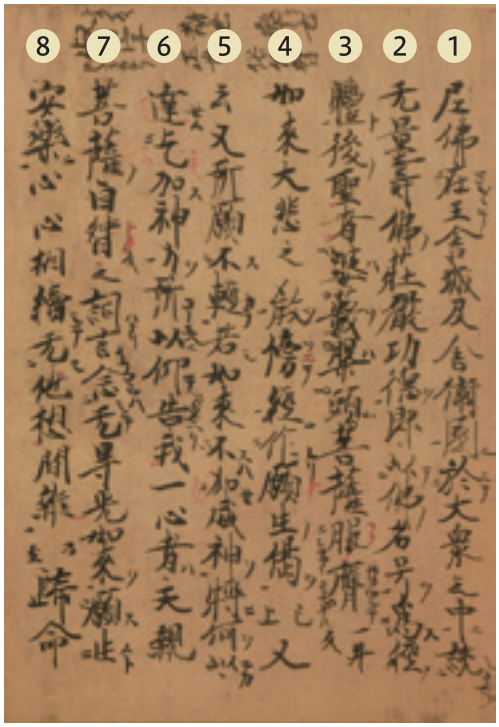
写真は影印本だが「坂東本」に近い紙が使われており、色の違いから複数の用紙が用いられていることが確認できる。

そしてこれらの紙の綴(と)じ方についても特徴があります。全体はおおむね紙の端と端を綴じる袋綴じ①ですが、一枚の切紙(きりがみ)を綴じている箇所②、折り目綴じ③や巻子(かんす)綴じ④などの特異な状況のものまであります。特に折り目綴じは、一枚の紙で表裏四頁分に文字を記すことができます。この綴じ方は「信巻」に集中していますが、「信巻」は文章量が多いため、冊子があまり厚くならないようにということが念頭にあったと考えられます。

また「坂東本」本文の行数について、基本的には一頁あたり八行で記されていますが、そうでない箇所もあります。次頁の写真は、どちらも「行巻」の一頁ですが、右は一頁あたり八行で書かれているのに対し左は七行で書かれています。状況によって違うところもありますが、おおよその目安として、一頁あたり八行のところは、筆致からして六十歳ごろに書かれた箇所です。そして七行で書かれている箇所は、このほかにも、例えば「総序」「教巻」「信巻」が該当しますが、八十四

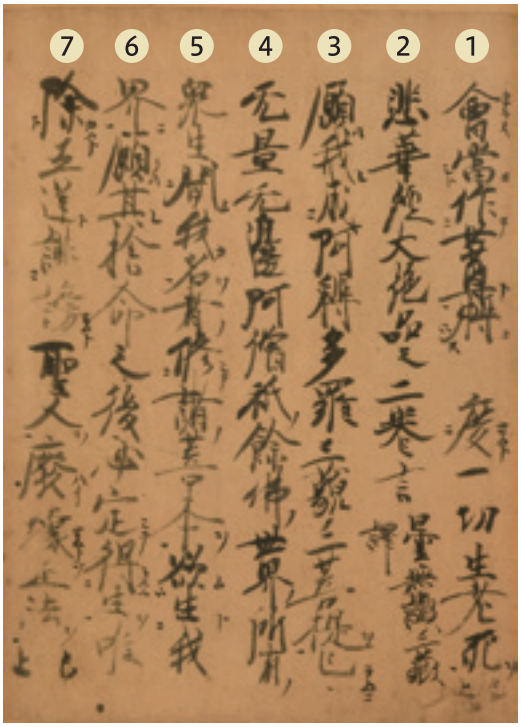


【1頁あたり8行の箇所】



「行巻」…宗祖60歳ごろ

【1頁あたり7行の箇所】



「行巻」…宗祖84歳ごろ

歳以降の筆であろうと考えられています。この左の文章も八十四歳ごろと考えられます。

つまり、六十代の頃には八行でお書きになり、晩年になると七行でお書きになっているということがこのような箇所から窺い知れます。実際に見比べてみると、八行で書かれている文字よりも七行で書かれている文字は少し大きくなっていることがわかります。こういったところから、視力が衰え、細かい文字を書くことが困難になった晩年に至ってなお、「坂東本」に手を入れ続けておられた聖人のご苦労が偲ばれます。

文章の追加・削除

「坂東本」にはさまざまな特徴がありますが、文章を追加・削除する場合の方法もその一つと言えます。消しゴムも修正ペンもない時代、一度書かれた文章に対してどのように手を入れていかれたのか、その特徴的な箇所を見ていきましょう。